

## 東大史料の意義と当面する課題

大久保 利 謙

『東京大学百年史』もいよいよ全巻完結へと近づきつつある。五十年史の場合は通史二巻であり、編集期間もわずか三年ぐらいであったので、史料は学内所蔵の文書、年報、一覧などを用いたにすぎなかったが、今度の百年史は編集の規模も全学的でとうてい比較にならない。編集に当って基礎作業の史料収集も学内記録類のみならずひろく学外に手をのびし、歴代総長その他諸教授関係に及んだのでその範囲、数量も膨大となりつつある。

古いところでは初代総長加藤弘之、文科系の大御所の井上哲次郎の日記などは本学史料というより明治大正の文化史、学術史、または学界人脈などを調査するうえに貴重な秘録である。昭和期になると長与又郎・平賀譲・内田祥三等、戦前期の諸総長の個人資料は分量も多く今回東大百年史の編集事業に重大な意味をもたらした。このほか、戦後についても、加藤一郎元総長、藤井隆名誉教授、加藤橋夫名誉教授等々から文書の寄託をうけているし、さらに近年は停年退官する諸教授から、次々に東京大学に關係する資料が寄託されている。

このような収集史料のほかに本学の本部、各学部、研究所の記録類

がある。これも明治十年四月の東京大学成立以前に遡ると膨大なものとなるわけであるが、度々の建物の移転、関東大震災、過般の戦災などでかなり失われたものもあるが、今回の百年史編纂に当って学内各所に散在するものを極力集めて現在百年史編纂室に保管している。そのうちには貴重史料もあり、分量も多くなっている。そこでおこる問題は、近き将来の百年史刊行完成後これらの史料類をどうするか、ということである。これは何としても大学史料アーカイヴスを設けて永久に保管をしなければならぬ。これを使用済の反古として散逸にまかせるといふようなことはあつてはならないことである。

『東京大学百年史』全十巻は、もとより日本近代大学史、さらに近代文化、近代学術史研究の基礎文献として研究者必読の書となるものである。その学術的価値はきわめて高いのであるが、しかしこれは何としても周倒綿密なものとはいえずやはり編纂物であつて生の史料、記録ではない。通史編のほかに資料物を設けてその充実に力をそそいでいるがこれは何としても重要なものを選択して活字化したものである。大学の脈々とした百余年の歩み、教官学生の生きた姿、研究活

動、さらに諸學術發達の実体を宿しているのはやはり古文書、古記録等の史料そのものである。だから現在集まりつつある大学文書、史料は本学としては何物にもかえ難い、散逸させてはならない至宝なのである。そこでこの至宝保存のためには、今回の本学創立百年の記念事業の一環として百年史の編纂と併せて大学史料アーカイヴス設置の必要が生ずるのである。

\*

明治末大正以降は、全国各地の国立、公立、私立の各大学がそれぞれ創立三十年、五十年を迎えて三十年史、五十年史の編纂が行われている。さらに戦後の最近は創立百年を迎える大学も少なくないので百年史の編纂刊行が盛んである。規模は小さきままであるが、なかには充実した編纂スタッフによって史料蒐集に力をいれて編纂を行っているものも少なくない。また収集史料保存の設備を設けている大学もある。さらにこれは日本のみではなく、諸外国でも大学史の研究、編纂が盛んである。本学百年史編集室の小川千代子氏の調査報告（全国歴史資料保存利用機関連絡協議会『関東部会報』第七号）によると、アメリカでは、大学文書館（アーカイヴス）の設置率は九六%、全世界でも八〇%強で、これを設置するのがむしろ常識となっているということである。

ところが、日本の場合、大学として最も歴史が古く、且つ中心的地位にある東京大学がこの大学史料の収集保存という点では必ずしも各大学に比べて模範的であるとはいえないのが現情であろう。筆者のごときもこの本学史料のアーカイヴス設置が、創立百年記念事業として

忘れてはならないことであると信じている。いささか私事にわたるが、筆者が往年、五十年史編纂の一員として学内の古文書、古記録の収集整理に当たった思い出から、この感を一層深くしている。もはや五十余年以前のことと記憶もたしかではないが、当時学内諸々の倉庫から捜し出した古記録が現在そのまま残されているかどうか、なかには所在が不明となっているものも少なくなかろう。

\*

それではなぜ本学の史料記録がそれほど大切なのか、この問題を考えてもらいたい。これは何も自分の大学自慢の自画自讃ではなく、客観的、歴史的にみて日本近代のユニバシチーの發達、ひろく諸學術は文字どおり遠く幕末の蕃書調所・医学所からの伝統を持ち、東京開成・医学校を経て成立した東京大学・帝国大学・東京帝国大学を中心として發達した。明治中期からは東京帝国大学から分岐した京都その他の各帝国大学、ついで慶應義塾・早稲田大学等の各私学において私学的、在野的な特色ある学問の發達をみていることも大きな意義がある。このように明治中期以降は、まことに百花繚乱である。しかしアカデミックな近代諸學術の發達ということになると東京大学の占める位置は圧倒的に大きいのである。そういう意味において本学百余年の歴史は日本の近代文化史、學術史のうえに大きな比重を持っているといっている。この現象は明治期に遡れば遡るほど大きいのである。そこで本学の諸記録類の持つ文化史的また學術史的史料として持つ価値がきわめて大きいことがわかるであろう。

このような貴重な文化史料の保存をどうするか、これは本学当局に

要請して具体案の考慮を求めなければならないが、やはり独立したアーカイヴスの形をとることが望ましい。この本学史料アーカイヴスは上記のような本学の文化史的地位から、たんに本学関係史料の収集機関にとどまらず、ひろく日本近・現代の大学史、学術史の研究センターという規模としてもらいたい。これはまた、本学の歴史的地位からいって本学の義務といってもよからう。何となればこれは他の国公私立大学では出来ないことであるからである。外国の研究者が日本の大学史、学術史の研究に来た場合、現在は案内すべきアーカイヴスの名物はない。この現情では文化国を誇るとすればまことに困るのである。そこで本学が率先してこの欠を補うことが大きな責任となるともいえよう。

本学史アーカイヴスは前記のように日本近・現代大学史、学術史の研究センターとしてひろく研究者に公開されることが望ましい。そうなるのと注文もいろいろでてくる。まず関係史料収集であるが、これはなるべく広汎に今後百年史完成後も引きつづいて継続事業としてすすめてもらいたい。前記のような全国的な研究センターとなれば、収集史料も、なるべく広汎なものとして、大学行政、学術行政関係の史料にも及ぶことが望まれる。これは国立公文書館その他から組織的にコンピュータで整理収集するのである。また明治以降の既刊の各大学史をそろえてもらいたいし、さらに出来れば欧米大学史の代表的文献も集めておく必要がある。もちろんこの事業は相当の収集整理費、人件費を伴うものであるから困難なことはわかっているが、これは前記したように本学しかできないことである。本学当局として考慮され、将来こ

の大学アーカイヴスが本学の誇りとなるような研究機関となって欲しいものである。

(おおくぼ としあき 東京大学百年史編集委員会委員)